

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 5 日現在

機関番号：14401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26590023

研究課題名(和文)日独比較を通じた「空襲の記憶継承学」の構築

研究課題名(英文)The construction of the "study of inheritance of memory on air raids" by comparing Japan and Germany

研究代表者

木戸 衛一(Kido, Eiichi)

大阪大学・国際公共政策研究科・准教授

研究者番号：70204930

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究活動を通じて、日独2国間にとどまらない空襲体験者・記憶継承活動者・研究者のネットワーク作りにある程度成功した。その成果は、個別の研究論文・学会報告に反映したほか、包括的な締めくくりとして、研究代表者・分担者全員が関わって、第7回戦争社会学研究会大会において、テーマセッション：「空襲の記憶」の境界 時間・空間・学問を越境して を構成するとともに、同学会が編集する論集にもそれぞれが寄稿して、広く社会に還元した。

研究成果の概要(英文)：We have succeeded to some extent in networking of victims, memory successors and researchers of air raids, not only between Japan and Germany. The results of our research activities have been reflected in the individual research papers and the conference reports. At the last stage all the participants of the research project made together the theme session "boundary of memories of air raids - beyond time, space and science" at the seventh conference of the Society for Sociology of Warfare and wrote essays to the journal that was edited by this scientific society.

研究分野：ドイツ現代政治

キーワード：空襲 記録 記憶 平和運動 加害・被害 メディア ジェンダー

1. 研究開始当初の背景

冷戦後、国際関係の変化や歴史認識の見直しを背景に、自治体や博物館、研究機関、アーティスト、非体験世代といった多様なアクターを巻き込んだ新たなタイプの空襲記憶の継承活動が世界各地で展開されるようになった。空襲体験者を中心とする従来の記録運動とは異質なこれらの活動は、当該社会の政治文化に少なからぬ影響を与えているにもかかわらず、その実態や社会的意義については十分な学問的検討が行われてこなかった。

日本とドイツは、単に第二次世界大戦における敗戦国というだけでなく、空襲による被害をまず他国に与え、後年自らその被害を受けたという共通点を持つ。このうちドイツでは長らく、「戦争被害者としての空襲の記憶」が国家レベルで封印される状況が続いた。イェルク・フリードリヒ著『ドイツを焼いた戦略爆撃』(原著2002年)などが刊行された後、ようやく空襲体験が公に語られるようになったが、空襲研究も、空襲体験・記憶の継承活動も、なお範囲が限られている。他方日本では、1970年代以降、各地の「空襲を記録する会」が残した成果が市民運動として展開してきたが、研究者を交えての総合的・体系的な分析の蓄積は、なお不十分な状態が続いている。

2. 研究の目的

そこで本研究は、空襲の記憶論を日本とドイツの戦後過程のなかで検討し、空襲体験者・記憶継承活動者・研究者からなる三者間のネットワークの形成という方法論を打ち立てることを目的とした。具体的には、日独双方の学術研究での位置づけに乏しい空襲研究について、両国の比較も意識しつつ、新たな研究領域としての意味付けを図った。その要点は、以下の3点である。

(1) 冷戦後20余年を経たドイツでの空襲記憶の継承活動と、1970年代以降市民運動として蓄積された日本の空襲記録運動とを比較検証する。

(2) 非体験世代に空襲記憶を継承する活動の社会的意味を問い、日独双方向のコミュニケーションを図りながら、学問としての「空襲の記憶継承学」構築を目指す。

(3) 体験者数の不可避的減少に鑑み、継承の方法論などを学問的に理論化し、空襲体験者・記憶継承活動者・研究者間のネットワークを持続的なシステムとして確立する。

3. 研究の方法

日独をベースに、空襲体験者・記憶継承活動者・研究者からなる三者間のネットワークの形成という方法論を追究し、「空襲の記憶継承学」の課題・方法の新たな学問的理論化・体系化を目指す本研究においては、

(1) 文献資料だけでなく、オーラルヒストリーの蓄積を記録としても読み解き、新たに

資料として注目することと、さまざまな空襲研究者との研究交流を通じて、日独両国における空襲の記憶継承のありようを明らかにすること、

(2) 戦争記憶を継承する活動の社会的意味や継承の方法論などを学問的に理論化することに重点的に取り組んだ。

1年目には、空襲の記憶継承に関する資料・情報を収集し、その歴史的特質の分析を開始、日独の空襲体験者・記憶継承活動者・研究者のネットワーク作りにも着手した。

2年目には、より深く戦後空襲記憶の歴史的・政治的背景を解明するための資料収集や関係者の聞き取りを行い、上記のネットワーク作りにも本格的に取り組んだ。

3年目には、「空襲後」の日独社会の体系的比較を行いつつ、「空襲の記憶継承学」の構築に向けての学会報告・論文執筆を行い、研究の成果を広く社会に還元した。

4. 研究成果

当初企図していたドイツの空襲体験者ないし記憶継承活動者の来日は実現できなかったとは言え、本研究活動を通じて、日独にとどまらない空襲体験者・記憶継承活動者・研究者のネットワーク作りにある程度成功した。

第一に、神戸、旭川、静岡、福山など、これまで比較的注目されてこなかった日本国内の諸都市における空襲の記録・記憶の多様なありようを確認するとともに、学問的な土台の上にそれらが相互に連携する体制づくりに貢献した。

第二に、従来蓄積してきた東京・大阪とドレスデン・プフォルツハイム(ドイツ)との運動面・学術面の連携をさらに発展させたことに加え、広島・長崎・土崎とドレスデン、ゲルニカ(スペイン)の空襲体験者・記憶継承活動者を繋ぐ「ともに平和の道を歩む協力協定」の活動に研究者の立場から支援した。この「協力協定」はあくまで民間の活動で、財政的・学問的裏付けに乏しい嫌いがあるが、だからこそ研究者が果たすべき役割は小さくなく、本研究の所期の遂行意図の妥当性が確認された。

第三に、アジア地域においても、日本に限らず、植民地期朝鮮、台湾、さらにはオーストラリアにまで研究の射程を広げ、空襲の記録運動の拠点ネットワーク化を相当程度進めることができた。

以上の研究成果は、個別の研究論文・学会報告に反映したほか、包括的な締めくくりとして、本研究プロジェクトの研究代表者・分担者全員が関わって、第7回戦争社会学研究会大会において テーマセッション:「空襲の記憶」の境界 時間・空間・学問を越境して を構成するとともに、同学会が編集する論集にもそれぞれが寄稿して、広く社会に還元した。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 7 件)

木戸衛一、ドイツの戦後70年 - 「解放」認識の定着と揺らぎ、唯物論と現代、査読無、55、2016、2-18

柳原伸洋、戦後社会の「平和の風景」を探る(2) - ドイツ・プフォルツハイム市での実地調査をもとに、東海大学紀要文学部、査読無、105、2016、155-169

柳原伸洋、日本・ドイツの空襲と「ポピュラー・カルチャー」を考えるために、マス・コミュニケーション研究、査読無、88、2016、35-53

柳原伸洋、戦後社会の「平和の風景」を探る - 旭川市での実地調査をもとに、東海大学紀要文学部、査読無、103、2015、83-93

長志珠絵、「防空」のジェンダー - 戦前戦後における日本の空襲言説の変容と布置、ジェンダー史学、査読有、11、2015、21-35

長志珠絵、帝国の防空と空襲のあいだ、日本史研究、査読有、643、2015、57-77

木戸衛一、ドレスデンに見る空襲周年記念と歴史和解、季刊戦争責任研究、査読無、82、2014、64-72・83

[学会発表](計 13 件)

柳原伸洋、空襲記憶とドイツの都市 - プフォルツハイムの事例、空襲被災者運動研究会、2016年6月12日、東洋大学(東京都文京区)

木戸衛一、米軍との「接触」に起因する別のドイツ像、歴史学研究会現代史部会、2016年5月29日、明治大学(東京都千代田区)

木戸衛一、軍事化する世界と「空襲の記憶」 - ドイツの事例から、戦争社会学会第7回大会、2016年4月24日、埼玉大学(埼玉県さいたま市)

長志珠絵、「空襲」イメージがはらむ記憶の国境線 - 帝国の防空とその記録・記憶、戦争社会学会第7回大会、2016年4月24日、埼玉大学(埼玉県さいたま市)

長志珠絵、帝国の防空と空襲のあいだ、日本史研究会、2015年10月10日、京都大学(京都府京都市)

木戸衛一、ドイツの戦後70年 - 「解放」認識の定着と揺らぎ、関西唯物論研究会、2015年9月26日、阪南大学(大阪府大阪市)

柳原伸洋、ドイツと日本、空襲をめぐる空想、日本マス・コミュニケーション学会、2015年6月13日、同志社大学(京都府京都市)

Eiichi Kido、Erinnerung und Politik、Treffen der Generationen zum 13. Februar、2015年2月12日、Kulturthaus Dresden(ドイツ・ドレスデン市)

Eiichi Kido、Erinnerungsort des Luftangriffs auf Tokyo、Internationales Kolloquium „Der Friede der Städte. Kommunen im Engagement für eine Kultur des

Friedens“、2015年2月12日、Evangelische Hochschule Dresden(ドイツ・ドレスデン市)

長志珠絵、越境する戦争の記憶 - 空襲研究をてがかりに、韓国日本学会、2015年2月7日、建国大学校(韓国ソウル市)

柳原伸洋、怒りから「和解」へ? - ドイツの戦災教会研究に向けて、東海大学文学部「知のコスモス」シンポジウム、2015年1月21日、東海大学(神奈川県平塚市)

長志珠絵、戦前戦後における空襲言説の変容、ジェンダー史学会、2014年12月14日、横浜国立大学(神奈川県横浜市)

柳原伸洋、21世紀の平和教育のペダゴギーを展望する - 「グローバルな読み書き」を中心としたワークショップ、日本平和学会秋季研究集会、2014年11月8日、鹿児島大学(鹿児島県鹿児島市)

[図書](計 3 件)

木戸衛一・長志珠絵・柳原伸洋他、勉強出版、ポスト「戦後70年」と戦争社会学の展開、2017、183

柳原伸洋他、勉強出版、想起の文化とグローバル市民社会、2016、1-400

木戸衛一他、法律文化社、平和と安全保障を考える事典、2016、712

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木戸衛一 (KIDO, EIICHI)

大阪大学・大学院国際公共政策研究科・准教授

研究者番号：70204930

(2) 研究分担者

長 志珠絵 (OSA, SHIZUE)
神戸大学・大学院国際文化研究科・教授
研究者番号：30271399

柳原 伸洋 (YANAGIHARA, NOBUHIRO)
東海大学・文学部・講師
研究者番号：00631847

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
なし